

アカホの木

泉芳朗



冬の光は沖天に流れて

池面は数日来じめじめ淀んでゐる

アカホの木は一つ古木ゆゑに

杖のやうに気根をたより

その南の枝に鳥は一羽 未だ地上に達しない光を
貪つてゐる

鳥は ただ 黙々と

村人たちの悲しい迷信の上に不可思議な運命をまじ
なひ

樹下にたじろぐ二人三人の村人は

木梢にうそぶく彼の運命の声に胸をおさへてゐる

一

このアカホの木に鳥がなければ、それは村中に起るべ

き死人かお産かの前兆であると村人は信じてゐま

す

二

後註

一 ここから1段階小さな文字

二 ここで小さな文字終わり

底本：「沖縄文学全集 第1巻 詩※ [#ローマ数字1、1-13-21]」国書刊行会

1991（平成3）年6月6日第1刷

底本の親本：「泉芳朗詩集」泉芳朗詩集刊行会

1959（昭和34）年

入力：坂本真一

校正：フクボー

2018年2月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。